

日本における『家礼』式儒墓について

—東アジア文化交流の視点から(五)

吾妻重二

はじめに

本稿は当紀要第五十三輯～第五十六輯(二〇二〇～二〇二三
年)に発表した「日本における『家礼』式儒墓について—東ア
ジア文化交流の視点から」(二)～(四)に続き、日本における
『家礼』式儒墓を検討するものである。

今回は主に近世中期から後期、すなわちおおむね十八世紀初(享
保年間)以降の事例をとりあげ、この時期の日本において朱熹『家
礼』にもとづく墓にはどのようなものがあるのか、その主要なも
のにつき考察したい。

ここで取り上げる事例のうち、京都の石田梅岩に始まる「石門心
学者たちの墓制が『家礼』式であることや、心学の家系に生まれ
た画人富岡鉄斎の墓も同様であることは従来知られておらず、大
阪の含翠堂創設者や懷徳堂の儒者たちの墓がこれまた『家礼』に

のつとるものであること、富永仲基の父芳春の墓もこれと同型で
あることなどもまったく注意されていない。ここでは単に紹介レ
ベルにとどまらず、行論上必要な論証も加えつつ論じてみたい。

墓の諸事項に関する記載の仕方は前稿と同じで、『家礼』式墓碑
の特色をふまえ、最初に円頭型(タイプA)か尖頭型(タイプB)
かをまず示し、ついで墓碑正面に刻まれた題字をかぎ括弧つきで
掲げる。さらに碑身の寸法(センチ)を高さ×幅×厚さで示す。
跌(台石)の寸法は高さのみを記した。他に背面などの文字、墳
土の有無、文献上に見られる『家礼』との関係、その他の特徴に
ついても考察を加えた。

一 日本における『家礼』式儒墓—石門心学者その一
1 石田梅岩ら心学者

○石田梅岩(一六八五—一七四四)(図1および図2)

尖頭型（タイプB）

「石田勘平之墓」

碑身 八十七・五×三十四×二十三（軒部分を除くと二十・五）

踏 方踏 十七・五

背面に「丹波桑田郡東懸邑産、居于洛陽／貞享二乙丑九月十

五日生／延享元甲子九月廿四日終／享年六十歳」と刻む

墳土 なし

所在 京都市東山区延年寺旧跡墓地（鳥辺山^①）

石田梅岩は石門心学の創始者。墓所は京都東山のいわゆる鳥辺山の見晴らしのよい地にあり、石欄に囲まれた重厚なつくりである。墓碑には梅岩の通称「勘平」の名が刻まれている。

注意したいのは、〈図1〉に見るように、その墓が浅見綱斎墓所に寄り添うように傍ら（西側）に東面していることである。しかもその形式は綱斎の墓とまったく同じ形式、すなわち尖頭型（タイプB）で、上部にいわゆる軒という凸出部を有する『家礼』式の一類型となっている^②。碑身も、綱斎のものに比べて高さが七センチ、幅が二・五センチほど大きいだけでほぼ等しい。綱斎が亡くなったのは正徳元年（一七一二）で梅岩の死去に三十年余り先立つから、梅岩の墓が綱斎墓を模してここに作られたことはますます間違いない。

このように梅岩の墓が『家礼』式であることは驚きであったが、そもそも梅岩の思想は「基本的には朱子学の性理説に由来する」^③

と指摘されるように、心性論や性善説にもとづく修養論、万物一体観など朱子学の強い啓発のもとに成り立っており、みずからの学問を「我儒」とか「我儒学」と呼ぶなど儒教への共感が顕著である^④。仏教でいう極楽や地獄についても否定的であり、儒教的死生観の持ち主だったらしい^⑤。ただ梅岩は『家礼』に関して特に論じていないようであり、また高弟手島堵庵の「石田先生事蹟」も梅岩の葬儀につき「平安の東南鳥邊山に葬る」というだけで『家礼』に言及してはいないが、関連資料として宝暦十年（一七六〇）、梅岩十七回忌の際に堵庵が同門の齋藤全門・大江資衡（玄圃）とともに定めた忌祭の式次第を見ると、『家礼』の影響をはっきりと知ることができる。この式次第は従来考察されたことがないようだが、重要なのでその祭式全文を引用する^⑦。

祭式

序立	面々座二付ナリ	
啓門	幃ヲ上ルナリ	斎房／資衡
上香	各焼香也以列上	
参神	齊四拜	
献饌	供物備ルナリ	
亞饌	二ノ膳ナリ	資衡
献醴	アマサケヲ献ス	斎房
誦遺	御遺書ヲ読ムナリ	全門

再 拜

侑食 食ヲス、ムル_レニテ
箸ヲ立ル也

喬房

闔門 幃ヲ下スナリ

喬房／資衡

説遣 御遺書ヲ講スルナリ

全門

啓門

喬房／資衡

再 拜

献茶 茶ヲ献スルナリ

全孝

再 拜

読祭 祭文ヲヨムナリ

喬房／資衡

再 拜

徹饌 供物ヲ下ルナリ

送神 神霊ニイトマゴヒスルナリ

礼 畢 齊四拜

ここにいう喬房は堵庵のこと、全孝は全門の子である。この序立に始まり、參神、三饌（三献）、侑食、闔門、啓門、献茶、祭文（祝文）、徹饌、送神（辞神）と続く礼目は『家礼』の祭礼、とりわけ四時祭のそれとぴったり一致している。特に興味深いのは飲食を薦める侑食のあと闔門が続くことで、闔門とは死者の霊が供物を食べることを想定したうえで、それを見ないようにしばらくのあいだ門を闔すことをいい、『家礼』に明記される儒教独特の礼

日本における『家礼』式儒墓について

目である。ここでは代わりに幃を下して視線を遮ることにして『家礼』を読み替えている。この十七回忌祭は京都東山双林寺で行なわれたので場所こそ寺院であるが、実際の儀礼の内容は仏式ではなく儒式、すなわち『家礼』式なのである。

ちなみに堵庵は梅岩二十五回の忌祭に当たっては「散斎七日、致斎三日にして誠敬を盡し玉へり」と伝えられる。「散斎七日、致斎三日」は『礼記』祭統篇の語で、散斎は行動を謹慎すること、致斎は心を清浄に保つことである。こう見てくると梅岩や堵庵が儒式の葬祭を強く意識していたことがわかる。

これに関連して考慮されるべきは梅岩の師承問題である。梅岩が誰に師事したのかははっきりせず、わかるのは小栗了雲なる禅僧ぐらいであるが、そのみで朱子学に対する梅岩の深い理解は説明がつかないように思われる。梅岩は享保十四年（一七二九）、四十五歳頃の開悟以前に朱子学の「講釈」をよく聴いており、そうであれば、その中に綱齋の講釈が含まれていたとしても不思議ではあるまい。竹中靖一氏は名著『石門心学の経済思想』において、梅岩がいかなる儒者に師事したかはつまびらかではないが、朱子学の造詣の深さから「朱子学派の師に似たものと思われる」と指摘しており、その「朱子学派の師」の一人が綱齋だったのである。ただし、綱齋は正徳元年（一七一二）、梅岩二十七歳の時に死去しているから、綱齋の後継者として京都で講学した若林強斎（一六七九—一七三二）の講席にも連なったのではないかと推

測される。

この推測には実はもう一つ根拠があり、大津市にある強斎の墓がこれまた軒をもつ尖頭型であり、梅岩の墓とまったく同じ形式で作られているのである。この軒をもつ形式はもともと山崎闇斎が『家礼』をベースに考案したもので、強斎の『家礼訓蒙疏』巻三にその図を載せているので参照されたい（図3）。山崎闇斎の墓碑ももちろん軒つきではあるが、軒の張り出しが小さいのに比べて、綱斎らの場合は前に大きく張り出しているのが特徴的である。このように綱斎・強斎・梅岩の墓制が一致しているのは偶然ではなく、そこには一定の学問的継承関係があると見られるのである。

綱斎・強斎と梅岩の師承関係はこれまで明確に指摘されたことがないようだが、右に見たような墓所の位置関係や墓碑の形式、祭礼の方式をふまえると梅岩が綱斎および強斎の影響を受けた可能性はきわめて高く、今後、梅岩の学問の由来を考える際念頭に置く必要があると思われる。

ちなみに現在、大阪中央区の大蓮寺には「石門心學先生之墓」の石標に後ろに梅岩、手島堵庵、岡本孝道の墓三基が並んでいるが、これらは大阪の心学明誠舎が明治三十八年（一九〇五）に社団法人として認可された後に、遙拝用の参り墓として新しく作られたものである。このうち岡本孝道（一八二八—一九〇三）は大阪の心学明誠舎を再興した人物で、これらの墓はいずれも鳥辺山の梅

岩墓を模した軒つきの尖頭型になっている。

さて、以下に見るように、この鳥辺山墓地には心学者たちの同形式の墓碑が林立している。すなわち綱斎の墓を取り囲むようにして『家礼』式の墓が建てられているのであって、はなはだ注目値する。

○手島堵庵（一七一八—一七八六）〈図4〉

尖頭型（タイプB）

「手島堵庵之墓」

碑身 七十二×二十八・五×十八・五（軒部分を除くと十六）

跌 方跌 十四・五

背面に「享保三年戊戌夏五月十三日生／天明六年丙午春二月

九日終」と刻む

墳土 なし

所在 同右

梅岩の高弟手島堵庵の墓は梅岩墓のすぐ南西側に、堵庵妻（杉江氏香室之墓）の墓と並んで西面している。石組の上に営まれた堅固な墓所で、墓碑は梅岩のものよりはいくらか小ぶりだが、尖頭型で軒つきという同形式である。また、背面に「○○生／○○終」と生卒年月日のみを簡潔に刻むのは、このあと示すように石門心学者、特に堵庵系門人の墓の通例ともなっている。

〈図5〉に見るように堵庵夫妻の墓所は戦前は生垣に囲まれていたが、現在それは取り払われて後方の景色が見通せるようになった

ている。写真の背後に見えるのは清水寺の三重塔である。

また、周囲に多数営まれている石門心学者の墓は、堵庵みずからの指示によって作られたものだったらしい。⁽¹⁶⁾

○手島和庵（一七四七—一七九二）〈図6〉

尖頭型（タイプB）

「手島和菴之墓」

碑身 七十二・五×二十八・七×十八・八（軒部分を除くと

十五・八）

跌 方跌 十四・五

背面に「延享四年丁卯春二月十五日生／寛政三年辛亥冬十月

廿四日終」と刻む

墳土 なし

所在 同右

和庵は堵庵長男で、堵庵が京都に開いた明倫舎の第二世舎主である。堵庵夫妻墓の西十五メートル程のところ、和庵妻の墓（周防氏蘭室之墓）と並んで東面している。いずれも軒つきの尖頭型で、大きさも堵庵のものとはほぼ等しい。ここは切石で囲まれた埜域となっていて、以下に見るように、区画の内側に和庵および子孫たちの墓が並び立っている。

○手島毅庵（一七九〇—一八三八）〈図7〉

尖頭型（タイプB）

「手島毅菴之墓」

日本における『家礼』式儒墓について

碑身 六十九・三×二十九×十九・五（軒部分を除くと十六・七）

跌 方跌 十五

背面に「寛政二年庚戌秋九月七日生／天保九年戊戌春正月二

日終」と刻む

墳土 なし

所在 同右

手島毅庵は和庵の孫で、墓は和庵夫妻墓と背中合わせに西面している。向かって右に毅庵妻の墓（田邊氏梅室之墓）が並び、さらに毅庵養子の手島訥庵（手島訥庵之墓）と訥庵妻の墓（尼崎氏清室之墓）、そして手島氏の墓（手島氏之墓）と続いており、すべて軒つきの尖頭型であることが注意される。

○杉浦止斎（一七一—一七六〇）〈図8〉

円頭型（タイプA）

「止齋先生碣銘」（篆題 正面上部に右から刻む）

碑身 九十八×三十七×二十六・五（軒部分を除くと二十四・五）

跌 方跌 十六・三

正面に墓碑銘をびっしりと刻む 文末「寶曆辛巳春社日少納言菅原朝臣輝長撰、大江資衡謹書」左面下「男杉浦宗之建」

墳土 なし

所在 同右

杉浦止斎は梅岩門人。梅岩や堵庵らの墓碑より大型で、『家礼』式のうち円頭型（タイプA）であること、上部に篆題を、正面に

碑銘をそれぞれ刻むことなどが当墓地の他の心学者とは違っており、軒を持つ点を除けば伊藤仁斎や東涯、仁斎門人の北村篤所らの墓碑と同じ形式である。¹⁸これは止庵が堵庵系統ではないためであろう。また墓碑銘撰者の大江資衡は後述するように梅岩門下のうち漢学者としても知られ、そのこともあつて漢学者ふうの墓碑になっていると考えられる。

大江資衡の撰になる碑銘は今は磨滅して読みにくいだが、戦前の寺田貞次『京都名家墳墓録』に翻刻があり、岩内誠一『教育家としての石田梅岩』にその書き下し文を載せていて参考になる。¹⁹なお、寺田『墳墓録』は「止斎」を「城斎」に誤っている。²⁰

2 中沢道二ら

○中沢道二（一七二五—一八〇三）〈図9〉

尖頭型（タイプB）

「中澤道二之墓」

碑身 七十五×二十八・五×十八（軒部分を除くと十六）

跌 方跌 十五

背面に「享保十年乙巳八月十五日生／享和三年癸亥六月十一

日終」と刻む

墳土 なし

所在 同右

中沢道二は堵庵門人で、京都の人だが江戸における心学普及の

立役者となった。墓碑は綱斎墓の南東に隣接して西面し、ちょうど梅岩の墓と斜めに向かい合うように立っている。道二の墓の向かって左に道二の子の中沢道輔の墓（「中澤道輔之墓」）が、右には堵庵門人の浅井祐敬の墓（「浅井祐敬之墓」）が並ぶ。いずれも典型的な軒つき尖頭型で、大きさは梅岩墓碑よりやや小ぶりである。堵庵墓碑にほぼ等しい。

なお、道二は江戸の心学教習所参前舎で没し、江戸の妙寿寺（現東京都世田谷区）に葬られたから、この鳥辺山の墓はその後作られたものであろう。²¹

○上河淇水（一七四八—一八一七）〈図10および図11〉

尖頭型（タイプB）

「上河淇水之墓」

碑身 七十一×二十八・五×十八・五（軒部分を除くと十六）

跌 方跌 十五

背面に「寛延元年戊辰十一月九日生／文化十四年丁丑十月四

日終」と刻む

墳土 なし

所在 同右

上河淇水は堵庵養子で和庵義弟。堵庵—和庵—淇水と承ける京都明倫舎の第三世舎主として、堵庵亡き後、江戸参前舎に拠つた中沢道二とともに東西の心学運動を担った。

墓は中沢道二墓の南十五メートルほどのところに、淇水妻の墓

〔大森氏淇室之墓〕と並んで東面し、切石でぐるりと囲まれている。興味深いのは〔図11〕に見るように、正面左手前に「手島氏瑩域」の標石があることで、この一帯はもともと手島家の瑩域だったらしく、その瑩域内に堵庵系統の心学者の墓が営まれたものと推測される。

○薩埵徳軒（一七七八一―一八三六）〔図12〕

尖頭型（タイプB）

〔薩埵徳軒處土〕

碑身 七十二×三十二・三×十八（軒部分は剥落している）

方趺 十八・三

正面題字の周囲に人名をびっしりと刻む 背面に「天保七年

孟冬建之」、右面に「樂行舎」と刻む

墳土 なし

所在 同右

薩埵徳軒は上河淇水門人で、墓碑は梅岩の墓のすぐ後ろに背中合わせに建てられている。上部が剥落しているが、もともと軒がついていたことは左右に残る縁部分からわかる。墓碑正面に隙間なく刻まれた人名は徳軒が京都で組織した心学講舎「樂行舎」の門人たちであろう。

もともと徳軒の墓は念仏寺（上京区）の薩埵家墓所に営まれたが、のちに門人が爪と髪をここに収めて石碑を建てたものである。²²この碑が「墓」と題字せず、また門人の名前を多く刻んでいるのは

そのためと思われる。なお、向かって左には樂行舎の人々が安政六年に建てた記念碑が建ち、往時の石門心学の熱意を伝えている。

○柴田鳩翁（一七八三―一八三九）〔図13〕

尖頭型（タイプB）

〔柴田鳩翁之墓〕

碑身 六十九×二十八・五×十九・五（軒部分を除くと十六・五）

方趺 十七

背面に「天明三年癸卯五月五日生／天保十年己亥五月三日

終」と刻む

墳土 なし

所在 同右

○柴田遊翁（一八〇九―一八七四）〔図14〕

尖頭型（タイプB）

〔中講義柴田遊翁墓〕

碑身 八十×三十・五×二十三

方趺 十八・五

左面に「春夢花遊童子」、右面に「明治七年十二月十九日歿／

門人等建之」と刻む

墳土 なし

所在 同右

柴田鳩翁は薩埵徳軒門人、柴田遊翁は鳩翁の子である。墓は杉浦止斎墓の南約五メートル、檜の巨木のすぐ西側に、背中合わせ

に建てられている。鳩翁の墓碑はこれまた軒つき尖頭型で、背面は剥落しているため文字は寺田『墳墓録』によって記した。²³一方、遊翁の墓碑は父鳩翁の墓碑よりもいくらか大きく、また、なぜか軒を持たない。

実は鳩翁と遊翁は宿坊としていた昌福寺（京都市上京区）に葬られていて、今回、昌福寺の墓も調査したところ、鳩翁の墓は縦長の立方体型であって『家礼』式にはなっていない（図15²⁴）。そもそも鳥辺山のこの墓は鳩翁門人が昌福寺の墓とは別に鳩翁の遺髪を納めたものであり、梅岩や堵庵の墓に合わせて特に軒つきの尖頭型を作ったのであろう。

一方、昌福寺の遊翁の墓は軒をもたない『家礼』式尖頭型で、よく見ると鳥辺山墓地の墓とまったく同じ形である（図16）。鳩翁の例からして、これも先に昌福寺の墓が作られ、のちに鳥辺山の墓が別に作られたものと思われる。

二 日本における『家礼』式儒墓——石門心学者その二

このように、延年寺旧跡墓地（鳥辺山）には石門心学直系というべき堵庵および堵庵系門人の墓地が営まれ、一種の「心学者壘域」となっているのだが、京都ではこれ以外にも石門心学者の墓が存在し、調べてみるとそれらもほとんどが『家礼』式に属するものである。

1 大江玄圃ら

○大江玄圃（一七二九—一七九四）〈図17〉

円頭型（タイプA）

「玄圃先生之墓」

碑身 七十×二十八×二十・二

趺 方趺 十四

背面は剥落しているが、もと墓碑文あり（後述） 左面に「宿

坊養壽院」、右面に「男維緝／維顯 建石」と刻む

墳土 なし

所在 京都市左京区金戒光明寺（黒谷墓地）²⁵

大江玄圃は梅岩門人で、名の資衡すけひらで呼ばれることが多い。徂徠学を奉じた漢学者だが、少年時代に梅岩に師事し、これに深く信服していた。上述したように梅岩の「祭式」の作成にかかわるとともに同門の杉浦止齋の墓碑文を撰し、さらに斎藤全門の墓碑文も撰している。²⁷

大江家の墓所はいわゆる黒谷墓地の紫雲院南門から南三十メートルほどの北側、山崎闇齋墓所からもほど近いところにある。玄圃の墓碑は『家礼』式の円頭型（タイプB）であって軒を持っていない。これは杉浦止齋のところでも触れたように、玄圃が堵庵門人ではないからなのであろう。背面は剥落しているが、そこに刻まれていた墓碑文は寺田『墳墓録』に翻刻されている。²⁸

なお玄圃の弟の成文は、男子のなかった富岡以直の婿養子とな

つて富岡家を継いでいる。富岡鉄斎の曾祖父である（後述）。

○股野氏（玄圃妻）

尖頭型（タイプB）

「資衡妻／股野氏之墓」

碑身 六十六×十七・三×十九・五（軒部分を除くと十七・五）

跌 方跌 十二

背面に墓碑文を刻むが磨滅がはなはだしい。右面に「使廳

官人大江資衡建／宿坊養壽院」と刻む

墳土 なし

所在 同右

玄圃（資衡）妻の墓で、〈図17〉に見るように、玄圃墓の左手前にある。この墓は大江家墓所のなかでも唯一、軒つきの尖頭型となっている。右面に「使廳官人大江資衡建」とあるように玄圃が建てたもので、玄圃は「使廳」すなわち朝廷の檢非違使庁に仕えていたためこういう。

○大江池岸（一六九八一―一七四九）〈図18〉

尖頭型（タイプB）

「池岸先生之墓（左行）元配昌壽孺人附」

碑身 七十六・五×二十八・五×十九・五

跌 方跌 十三

左面から背面、右面と墓碑文を刻むが苔に覆われて不明瞭。文

末「男 資衡建」

日本における『家礼』式儒墓について

墳土 なし

所在 同右

池岸は玄圃の父で算学者・本草学者であり、字の権甫で呼ばれることも多い。墓碑は軒のない尖頭型である。墓碑文末尾に「男資衡建」とあるので、これも玄圃が建てたものである。この墓は妻の昌壽孺人との合葬墓であって、正面左行に「元配昌壽孺人附」と刻まれているのが注意される。妻を合葬してこれを「附」と称するこの方式は山崎闇斎の祖父母および父母の合葬墓にも見ることができ²⁹る。『家礼』によれば、「附」はもともと死者の神主を家廟に新たに付け加えることをいうから、いわば『家礼』を墓制に応用した形態といえる。墓碑文は寺田『墳墓録』および白寄『くろ谷金戒光明寺に眠る人びと』に翻刻されている³⁰。

このほか、大江家墓所には玄圃の長男大江藍田の墓（藍田先生之墓、図17）、次男の大江荆山（荆山先生之墓、図19）の墓もあり、いずれも円頭型（タイプA）で小型である。

このように、大江家墓所の墓碑群はいくらかバリエーションがあるが、いずれも『家礼』をふまえた儒式墓となっている。彼らは心学者というより儒者としての意識からこのように造墓した可能性も考えられるが、大江玄圃が梅岩門人であるためここでとり上げた次第である。

ここ黒谷墓地には他にも石門心学者の墓が営まれており、今回調査はできなかったが、ついでに紹介しておきたい。斎藤全門（一

「富岡鐵齋先生
夫人佐々木氏墓」

碑身 七十七・五×三十・三×三十・五（軒部分を除くと二十

七・三）

方趺 二十二

背面に「天保七年十二月十九日 生／大正十三年十二月廿一

日卒」と刻む

墳土 なし

所在 同右

近代文人画の巨匠富岡鐵齋の墓は以直の墓の右隣にある。墓碑の「富岡鐵齋先生／夫人佐々木氏 墓」の文字は親交のあった内藤湖南の書で、〈図26〉はその拓本である。⁽³⁸⁾

上述のように、鐵齋高祖父の以直は梅岩高弟であり、曾祖父（以直の婿養子）の成文は石門学者大江玄圃の弟であって、鐵齋は石門心学を家学とする雰囲気の中で育った。⁽³⁹⁾そのため、軒つき尖頭型といい、背面の生卒年月日の記し方といい、みな石門心学の方式に沿うものとなっている。墓碑の大きさも手塚堵庵や中沢道二のとはほぼ同じである。

鐵齋は富岡家が心学の家系であることをよく自覚しており、大正七年（一九一八）九月、梅岩百七十五年祭を石門饗舎の同人とともに挙行している。⁽⁴⁰⁾これは前年の大正六年に梅岩が正五位に追贈されたことを墓前報告したもので、鐵齋がその時の祭文を読み

上げている。儒式の祭文であり、次のようなものであった。⁽⁴¹⁾冒頭にいう「百鍊」は鐵齋の別名である。

大正七年九月二十三日、富岡百鍊、饗舎ノ同人ニ代リ、謹ミテ
梅巖先生ノ靈ニ告ク。

先生身ヲ農家ニ起シ、商業ニ從ヒ、當時ノ頹風ヲ慨キ、世俗ノ浮薄ヲ悲ミ、奮然蹶起シテ心學ノ一派ヲ唱道シ給ヘリ。

先生ノ學タル、見性知仁ヲ基トシ、實踐躬行ニ由リ商工ノ子弟ヲ教ヘ、後人ニ模範ヲ垂レ、二百餘年、流風餘澤尚ホ盡キ

サルモノアリ。昨、大正六年十一月十七日、

聖上、先生ノ功績ヲ嘉シテ、正五位ヲ追贈シ給フ。是レ前古

未曾有ノ異典ナリ。吾等深ク

聖恩ニ感泣シ、位記ヲ奉シテ 先生ノ墓前ニ跪キ、其ノ事由

ヲ告ク。伏シテ願クハ吾等 先生ノ遺徳ニ浴シテ、永ク修身

齊家ノ効アラシメ給ハン事ヲ。

この祭文は書き下し文調であり、もとは漢文で書かれたものと思われる。鐵齋の墓碑は昭和になってから建てられたようだが、⁽⁴²⁾そこにこのような石門心学や儒教の伝統を強く意識する鐵齋の意向がはたらいっていたことは明らかであろう。

○富岡謙蔵（一八七三—一九一八）

尖頭型（タイプB）

「富岡謙藏之墓」

碑身 五十三×二十二・二×二十

方趺 十九

左面に「大正七年十二月廿三日歿／享年四十六」と刻む

墳土 なし

所在 同右

鉄斎の子の謙藏の墓は鉄斎墓の右側に並ぶ。京都帝国大学講師を務めた歴史学者だったが、父鉄斎に先立って四十六歳で死去した。その墓もまた尖頭型で軒をもつ『家礼』式で、正面には鉄斎の書で「富岡謙藏之墓」と刻まれる⁴³。鉄斎の墓に比べると小型だが、やはり軒つき尖頭型であって、鉄斎の設計と見られる。ちなみにこの謙藏の墓は寺田『墳墓録』にも記録されている⁴⁴。

なお、謙藏墓の右手には鉄斎異母兄の敬憲の墓碑、さらに鉄斎最初の妻多津（達）・娘秋の墓碑が並ぶが、こちらは縦長の立方体型であって『家礼』式ではない。敬憲は家業の法衣商を継ぎ、その墓もとは真宗大谷派の東大谷墓地にあったもので、心学とは関係が薄かったであろう。想像するに、鉄斎は心学の伝統を強く意識する際に梅岩以来の墓碑を想起して造墓したのと思われる。ただし、この形式がもともと『家礼』に由来するものだったことはおそらく知らなかっただろうし、鉄斎墓碑に題字した内藤湖南もそのことは知らなかったようである。

以上見てきたように、石門心学の人々の墓はおおむね『家礼』

式を基準として作られていたといえる。特に軒つきの墓碑は山崎闇斎、浅見綱斎、若林強斎と受け継がれた形式で、梅岩や堵庵、鉄斎らはその影響を受けているのである。このことは『家礼』の研究が立ち遅れていたためであろう、従来まったく注意されてこなかったが、儒教儀礼史あるいは儒教墓制史の一展開を示すものとして重要な事項と思われる。

三 日本における『家礼』式儒墓

— 含翠堂創設者、懷徳堂創設者たち

1 含翠堂創設者

○土橋友直（一六八五—一七二七）〈図27および図28〉

円頭型（タイプA）

「土橋誠齋之墓」

碑身 五十六×十八・八×十五・三

方趺 十六・五

墓碑の周りに文字は刻まない

墳土 なし

所在 大阪府八尾市・神光寺⁴⁶

八尾市の神光寺は大阪府の東端、生駒山系の信貴山にほど近い高安山麓にあり、含翠堂関係者や懷徳堂草創期の人物が葬られている。山門前左には彼らの墓所であることを記した碑身七十八センチほどの石標がある。

当寺の懷徳堂・含翠堂創始者の墓については坂上弘子氏の報告書^⑥があるので、それを参照しつつ筆者の調査記録と合わせて説明したい。

土橋友直^{つちはし}は号は誠斎、摂津平野郷（現大阪市平野区）の七名家のうち惣年寄をつとめた名望家で、享保二年（一七一七）、平野郷の有志と郷校含翠堂を創立しその堂主となった。三輪執斎、三宅石庵、五井持軒、伊藤東涯らを講義に招き、儒教にもとづく鄉村啓蒙・教育活動に務めたことはよく知られるとおりである。

当寺は土橋家の菩提寺であって、墓地西南の土橋家本家墓所が幅約七・五メートル、奥行き約七メートルにわたって切石で区画されている。そこには多くの墓碑が林立しており、友直の墓もその中にある。現在、墳土はないものの、火葬ではなく土葬だったようである^⑧。墓碑には号の「誠斎」の文字が刻まれ、履歴などの墓碑文は刻まれない。

友直の墓碑は『家礼』式の円頭型（タイプA）で、向かって左には妻三上氏の墓（貞順婦三上氏之墓）が同型、同サイズで並んでいる（図29）。これを『家礼』式というのは、何よりも、あとに述べる懷徳堂初代学主三宅石庵の墓碑と同型で、大きさもほぼ等しいからである。神光寺には三宅石庵の『家礼』式神主が保存されていることも留意される（後述）。また仏式の法名を刻まずに生前の号を刻むこと、いま述べたように土葬だったらしいことなどからも『家礼』の影響は明らかと思われる。友直は石庵に三

年先立って死去しているので、その墓は石庵の設計だったと見ることが可能であろう。

碑身の高さは五十六センチとかなり小さく、三宅石庵の後を継いで懷徳堂学主となった中井惣庵の墓碑（大阪市中央区誓願寺）の半分ほどの高さしかない。その理由はつまびらかではないが、謙讓質朴だったという石庵の意図が反映していると思われる、また中井惣庵撰・中井竹山補『喪祭私説』喪礼、誌石・碑の「立碑」の項に「大小狹闊称宜」（大小狹闊は宜しきに称^{かな}う）と、墓碑の大きさや幅は状況によって適宜定めればよいとしているのも考え合わせられる^⑨。

土橋家といい、あとに述べる石庵や懷徳堂関係者といい、その墓碑群はいずれも円頭型であるが、これも『喪祭私説』で墓碑の形を「円首」とするのに沿うものである。このように見えてくると、当墓地に林立する円頭型の小型の墓碑は懷徳堂の方針にもとづく造形であったことがわかる。もちろん『喪祭私説』は『家礼』をベースにしているから、当寺の含翠堂・懷徳堂関係者の墓地は『家礼』式墓の日本の変容を示していることになる。言い換えれば、これも日本における『家礼』式墓所の一つということができると思われる。

○土橋宗信（一六九三—一七五二）〈図30〉

円頭型（タイプA）

「土橋良慶翁之墓」

碑身 六十六×二十四・八×十九

方趺 三十二

墓碑の周りに文字は刻まない

墳土 なし

所在 同右

土橋宗信の墓は、土橋家本家の一段上の土橋家別家の墓地にある。含翠堂設立時の同志六名「興立成員」の一人で、伊藤東涯を含翠堂に招いた人物としても知られる。墓碑には号の「良慶」の文字を刻んでいる。いま見た土橋友直の墓碑よりいくらか大きいのが、同じ円頭型となっている。

2 懷徳堂創設者たち

○三宅石庵（一六六五―一七三〇）〈図31および図32〉

円頭型（タイプA）

〔萬年先生三宅君之墓〕

碑身 六十・五×十八・五×十二・五

方趺 二十二・五

墳土 なし

所在 同右

ここには懷徳堂創設者たちの墓所も営まれている。寺の墓地北隅がその埜域で、横五メートル、縦七メートルほどが切石で区画される。〈図31〉に見るように、三宅石庵の父母すなわち道悦（六

兵衛）・田中氏連名の墓碑が最奥中央にあり、その左右を囲むように墓碑がぐるりと並び、中央部分が広く空いている。この形式は山崎闇齋の墓所と同じなので、それを参照したかもしれない。

三宅石庵は懷徳堂第一代学主だが、含翠堂と関係が深いことは周知のとおりである。石庵はもと山崎闇齋門下の浅見綱齋に学んだが故あって破門され、江戸での講学を経て大坂で開塾、享保二年（一七一七）含翠堂が開設されるとしばしば講義に招かれた。含翠堂の命名も石庵によるもので、石庵の書になる「含翠堂」の扁額が大阪大学文学部含翠堂（土橋）文庫に現存する。享保九年（一七二四）三月から大坂の大坂のため平野郷にしばらく避難していた石庵は、同年十一月に懷徳堂が開設されると、その初代学主に推薦されるのである。⁵¹ 石庵の墓がここ神光寺に営まれたのも、当寺が土橋氏の菩提寺だったからに違いない。

墓碑正面には石庵の別号「萬年」の文字を刻む。碑身は土橋友直墓とほぼ同サイズで小型なのが印象的である。履歴などの墓碑文が刻まれないのも同様である。向かって右には石庵妻岡田氏（〔知順媪岡田氏之墓〕）の墓が並んでいる。

いま、懷徳堂の喪祭方針を示す中井斃庵撰・中井竹山補『喪祭私説』を見ると、墓を仏寺に作るのは現今の制度として許容しているが、火葬は厳禁しているので、⁵² 石庵の場合も火葬ではなく土葬であつたらう。仏寺に墓が作られたのも、そうした懷徳堂の方針によるものと理解できる。もう一つ、『喪祭私説』との共通点を

述べれば、墓碑正面の題字は「某諡若號・某姓先生之墓」と刻み、婦人の場合は「某媼某氏之墓」と刻むとされているので、「萬年先生三宅君之墓」、妻の「知順媼岡田氏之墓」という題字はこれによく一致していることがわかる。あとに見る懷徳堂関係者の場合についてもこの原則が当てはまる。つまり、その題字の方式もまた石庵に始まる懷徳堂の方針に沿っていることが確認できるのである。

もう一つ注目したいのは、〈図33〉に見るように、当寺に石庵夫婦『家礼』式神主が保存されていることである。「萬年先生神主」「知順室君神主」という題名、上部に切り込みがあつて板を前にはめ込むようになっていゝこと、櫃の中に収められていることなど、実物は未調査ではあるが、一見して『家礼』式の神主であるとわかる。こうしたことから石庵が喪祭儀礼において『家礼』の影響を強く受けていることが知られるのである。なお、そもそも神主は家で祀るものだから、いずれかの時点で三宅家から当寺に委託されたものと思われる。これは中井整庵や竹山など中井家の神主が現在、誓願寺（大阪市中央区）に保管されているのと同じである。

ちなみに、石庵弟の三宅観瀾（一六七四―一七一八）は石庵とともに江戸に出たあと水戸藩に仕え、彰考館総裁にまでなった儒者であるが、現在、東京都文京区龍光寺にあるその墓は『家礼』式ではあるものの、水戸藩ふうの四角錐型になっている。⁵⁵

○三宅春楼（一七一二―一七八二）〈図34〉

日本における『家礼』式儒墓について

円頭型（タイプA）

「春樓先生之墓」

碑身 五十九・三×十八・四×十一・五

方趺 十四

墳土 なし

所在 同右

春楼は石庵の次子で懷徳堂第三代学主。埜域内には妻太田氏（清閑婦太田氏之墓）、後妻川合氏（貞儀婦河合氏之墓）の墓もある。

○井上赤水（正臣）？―一七四五）〈図35〉

円頭型（タイプA）

「赤水先生之墓」

碑身 六十三×十九・三×十二・二

方趺 十二・五

墳土 なし

所在 同右

井上赤水は含翠堂を創立した同志「興立成員」の一人である。含翠堂設立時（当初の名は老松堂）の講舎は赤水の自宅を借り受けたもので、赤水はその講師も兼ねた。のちに懷徳堂助教となっている。

その墓碑の右には妻井上氏の墓（順静婦之墓）が、趺（台石）を共有して並んでいる。

○長崎黙淵（生卒年未詳）〈図36〉

円頭型（タイプA）

「長崎黙淵翁之墓」

碑身 六十六・五×二十一・五×十三・八

趺 方趺 十五

墳土 なし

所在 同右

長崎黙淵は懷徳堂を設立した五同志の一人で、通称は舟橋屋四郎兵衛であるが、墓碑にはその号の「黙齋」の文字を刻む。また趺を中村良齋と共有している。

○中村良齋（一六七四―一七三二）

円頭型（タイプA）

「中村良齋翁之墓」

碑身 六十八・五×二十三×十四

趺 方趺 十五

墳土 なし

所在 同右

中村良齋はこれまた懷徳堂を創設した五同志の一人で、通称は三星屋武右衛門だが、墓碑には他と同じくその号の「良齋」の文字を刻んでいる。

以上に見てきたように、神光寺内の含翠堂・懷徳堂関係者の墓は、円頭型（タイプA）であることのほかに、碑身の高さが六十

五センチ程度と一様に小型であること、碑面に履歴などの墓碑文を刻まないこと、土葬と思われることなどを特徴として挙げることがができる。このような特徴を共通して持つということは、そこに一定の方式があったことを意味する。そして、誰がその方式を作ったかといえは、儒者三宅石庵を置いて他にないであろう。石庵が定めた方式を関係者が守って増墓することで、このような特徴ある『家礼』式墓所が形成されたものと考えられる。

3 富永芳春ら

○富永芳春（一六八四―一七四〇）〈図37および図38〉

円頭型（タイプA）

「富永芳春居士墓」

碑身 六十一×十八・五×十二・五

趺 方趺 十五

墳土 なし

所在 大阪市天王寺区・西照寺⁽⁵⁶⁾

富永芳春はこれまた懷徳堂を創設した五同志の一人で、通称は道明寺屋吉左衛門。みずからの隠居所を懷徳堂に提供した。三宅石庵に学んだ教養人でもあり、思想家富永仲基の父としても知られる。これ以前、含翠堂創設を「興立成員」の一人として支援しており、含翠堂・懷徳堂双方の創設・運営に深くかかわった人物でもあった。

富永家の墓所は大阪市内の西照寺の奥にあり、多くの墓碑が東面して並んでいる。右端が芳春の墓で、正面にはその号を用いて「富永芳春居士」と刻まれている。「居士」は必ずしも法名を意味せず、水戸藩の安積澹泊墓の場合と同じく、『礼記』玉藻篇にいう学徳を備えながら仕官せずに家居する人物という意味で用いられていると思われる。⁽⁵⁷⁾ これ以外、周囲に文字は刻まれない。

ここで注意したいのは、墓碑の形が三宅石庵や土橋友直、井上赤水らと同じ円頭型（タイプA）で、サイズもほぼ同じで小型だということである。大商人だったわりにその墓は意外にも小さいなどと評される向きもあるが、何よりも含翠堂・懷徳堂系統の墓制ののっとってこのように作られていること、『家礼』の影響を受けていることを理解すべきであろう。向かって左には妻安村氏の墓（清信孺人安村氏墓）が芳春のと同型、同じ大きさで並び、背面に墓碑文を刻んでいる。正面に刻まれる「孺人」は中国礼制（儒教）における妻の通称である。

その左に並ぶのは芳春長男富永毅齋の墓（富永毅齋居士之墓）で、墓碑文が刻まれた背面部分は剥落し、墓碑の後ろに横向きに置かれている。現在は下部が少し欠けているが、戦前の木村敬二郎『稿本 大阪訪碑録』には全文が採録されている。⁽⁵⁸⁾ その左に並ぶ毅齋妻真多氏の墓（履信婦之墓）は同型だがやや小さく、周りの縁部分の幅が広がっている。背面には墓碑文が彫られている。なお、芳春三男の富永仲基の墓は失われているが、その代わり

〈図37〉に見るように、現在は「富永仲基招魂碣」が建てられている。碑身の高さ約七十二センチで、背面に「延享三年八月廿八日 年廿二」と刻んでいる。中国の礼制にもとづくこの碣は特段『家礼』式というわけではないが、この度の調査により昭和十三年（一九四三）、富永仲基の研究と顕彰に務めていた石濱純太郎らによって建てられたものであることが判明したので、ついでに報告しておきたい。

そもそもこの「富永仲基招魂碣」の文字は泊園書院で藤澤黄坡・石濱純太郎の受講生だった三原研田（一九一五—一九九六）によって昭和十二年（一九四二）に揮毫されたものである。⁽⁵⁹⁾ 三原は戦後、滋賀大学教育学部教授となった著名な書家・書道史研究家であり、筆者はかつて泊園書院出身の東洋学者の一人として紹介したことがある。⁽⁶⁰⁾ ただ、題字が三原の書であることはわかったが、この碣がいつ建てられたのかははっきりしなかった。しかし先日、関西大学泊園文庫の自筆稿本類の中に真市右衛門筆の「富永氏墓碑銘」の資料があることに気づいた。⁽⁶¹⁾ 昭和二十八年（一九五三）、真氏によって記された資料で、石濱純太郎の旧蔵にかかる。〈図39〉はその一部で、富永家墓碑群の記録自体としても貴重なものであるが、当碣について「本招魂碣は昭和十三年石濱純太郎氏外各学者により建立せらる」と明記されているのである。これは富永家と親戚関係にあり、断絶した富永家に代わってその墓所を代々守ってきた真氏が書き残したものであって、信頼できる記録である。

そもそもこの招魂碣の文字は誰が書き、また誰がいつ建てたのかは墓所のある西照寺でも不明であり、ネット上でも「明治にあって建てられた」などといった憶測が目につくのだが、長く忘れられていた事実が判明し、この問題にようやく決着がついたことになる。

(続く)

【付記】三原研田が泊園書院門人であることを教えてくださったのは、三原を書道の恩師と仰ぐ故杉村邦彦先生（京都教育大学・四国大学名誉教授、書論研究会会長）であった。この教示がなければ三原にたどり着くことはなかったかもしれないし、富永伸基招魂碣をめぐるこうした事実を再発見することも難しかったであろう。杉村先生は昨年（二〇二三）十一月、鬼籍に入られた。ここに生前のご教示に感謝するとともに、心よりご冥福をお祈りする次第である。

注

- (1) 筆者が石田梅岩墓を調査、撮影したのは二〇二〇年二月二十四日である。手島堵庵、中沢道二の墓についても同じ。その他、延年寺旧跡墓地の心学者の墓については特にことわらない限り二〇二四年二月二十三日に調査、撮影した。
- (2) 吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について―東アジア文化交渉の視点から」(二)『関西大学東西学術研究所紀要』第五十四輯一五頁。
- (3) 柴田実校注『石門心学』（日本思想大系四十二、岩波書店、一九七一年）解説、四六八頁。
- (4) 「我儒ニテ云ハ」(『都鄙問答』、柴田実編『石田梅岩全集』上巻、石門心学会、一九五七年、六頁)、「我儒学」(『我常ニ正ク儒法ヲ説』

『石田先生語録』巻十四、『石田梅岩全集』下巻、六六頁)。また「某儒ヲ學ンデヨリ以來ハ欲心アル望ミノタヘ申候。結構ナル佛法ヲ羨ム心ノナクナリタリ」ともいう(同、六〇頁)。

(5) 梅岩は「善ナル性」を磨き「善ヲ好ミ惡ヲ惡ム」ことで、苦しみをなく「安樂」に暮らせることが極楽、それができずに「常々ニ苦ム」しむことが地獄だとし、死後の世界としての極楽・地獄を認めていないようである。注4『石田梅岩全集』下巻、三一八頁以下。

(6) 注4『石田梅岩全集』下巻、六三二頁。

(7) 岩内誠一『教育家としての石田梅岩』（立命館出版部、一九三四年）二二二頁の引用による。梅岩十七回忌における忌祭の礼制定については「手島堵庵先生事蹟」(柴田実編『増補 手島堵庵全集』、一九七三年)六〇二頁、柴田実「手島堵庵年譜」(同)四頁にも記されている。

(8) 「手島堵庵先生事蹟」、前注『増補 手島堵庵全集』六〇四頁。

(9) 『石田先生語録』巻十八、注4『石田梅岩全集』下巻、一五〇頁。

(10) 竹中靖一『石門心学の経済思想』(増補版、一九七二年)四〇九頁。ちなみに同書は第五十四回日本学士院賞を受賞している。

(11) 注2吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について―東アジア文化交渉の視点から」(二)一六頁以下。

(12) 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』一(関西大学出版部、二〇一〇年)二二三頁。

(13) 山崎齋庵の墓碑については注2吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について―東アジア文化交渉の視点から」(二)一一頁以下を参照。

(14) 山田俊卿「心學起源」(心学明誠舎、一九一八年)に、明治三十八年(一九〇五)における心学明誠舎の社団法人認可の記述に続いて「乃ち大阪市南區下寺町大蓮寺境内を清掃して開祖贈正五位石田梅巖先生を始め手島堵庵、岡本孝道良先生の墳塋を建て、遙拝に便にして以て追孝の實を表し」(三五頁)という。梅岩は大正六年(一九一七)、政府により正五位を追贈されている。

- (15) 注7岩内誠一『教育家としての石田梅岩』二六三頁。
- (16) 注7岩内誠一『教育家としての石田梅岩』に「鳥邊山なる先師の墓畔には、堵庵は自己夫妻は素より、其の子孫の墓を築かした。従つて其の附近には石門名家の墓碑の築造されたるもの多く―例へば中澤道二・同道甫・浅井祐敬・中島道順・布施松翁・北村柳悦・柴田鳩翁・同遊翁・及び薩埵徳軒の樂行舎の墓碑等其の他―學祖景慕の情況を貽してゐるのを認める」(二二〇頁)といっている。
- (17) 図7の写真は二〇二〇年二月二十四日に撮影した。
- (18) 吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について―東アジア文化交渉の視点から」(三二)、『関西大学東西学術研究所紀要』第五十五輯、二〇二二年)九頁以下。
- (19) 寺田貞次『京都名家墳墓録』(一九二二年初版、一九七六年覆刻、村田書店)二六一頁。
- (20) 注7岩内誠一『教育家としての石田梅岩』二四二頁。
- (21) 石川謙『石門心学史の研究』(岩波書店、一九三八年)三八一頁。
- (22) 田中悠文『颯田本真尼の被災地支援』(『現代密教』第二十四号、二〇一三年)八〇頁。慈善救済活動に尽力した浄土宗の尼僧。颯田本真尼(一八四五―一九二八)は徳軒の子孫である。
- (23) 注19寺田貞次『京都名家墳墓録』二六一頁。
- (24) 二〇二四年二月二十三日、筆者撮影。あとの図16も同じ。
- (25) 白石正邦『石門心学の研究』(成美堂書店、一九二〇年)の柴田鳩翁事蹟に「昌福寺の塋域に葬る、門人等、相謀り遺髪をおさめて、別に一碑を鳥邊山に建て春秋祭祀今に絶せずといふ」という(一六三頁)。また柴田実校訂『鳩翁道話』(東洋文庫一五四、平凡社、一九七〇年)解説、三一九頁。
- (26) 筆者が調査、撮影したのは二〇二四年二月二十二日である。
- (27) 注7岩内誠一『教育家としての石田梅岩』二八一頁。
- (28) 注19寺田貞次『京都名家墳墓録』四五三頁。白善顕成『くろ谷金戒光明寺に眠る人びと』(浄土宗大本山 くろ谷金戒光明寺、二〇一三

日本における『家礼』式儒墓について

- 年)三三四頁に載せる翻刻はこれを転載したものとされる。
- (29) 注2吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について―東アジア文化交渉の視点から」(二二)一四頁参照。
- (30) 注19寺田貞次『京都名家墳墓録』四五四頁、注28白善顕成『くろ谷金戒光明寺に眠る人びと』三三三頁。
- (31) 注7岩内誠一『教育家としての石田梅岩』二二八頁。
- (32) 注28白善顕成『くろ谷金戒光明寺に眠る人びと』四五二頁。
- (33) 渡辺徹「本邦最初の経験的心理学者としての鎌田鵬の研究」(中興館、一九四〇年)八六頁。
- (34) 筆者が調査、撮影したのは二〇二四年二月二十二日である。
- (35) 当院山門前の石標背面に刻まれた由緒説明による。
- (36) 足立巻一『石の星座』(編集工房ノア、一九八三年)所収「富岡鉄斎碑林」、四六頁。このエッセイは下京区大雲院時代の富岡家墓所を調べていて貴重である。「瘞筆塚」の由来についても記されているが、ここでは省略する。
- (37) 前注、足立巻一「富岡鉄斎碑林」、四九頁。
- (38) 拓本は柏木知子・森藤光宣「富岡鉄斎と長尾雨山・内藤湖南展」について―作品・資料の翻刻と解説―(宝塚市史研究紀要『たからづか』第二十七号、二〇一五年)七五頁による。
- (39) 小高根太郎「富岡鉄斎」(人物叢書、吉川弘文館、一九六〇年)にも「以直の時から心学は富岡家の家学となり、鉄斎も幼年時代から、その雰囲気の中で成長することになった」という(三頁)。
- (40) 前注、小高根太郎「富岡鉄斎」一九八頁、富岡益太郎編「富岡鐵齋年譜」(『鐵齋大成』第四卷、講談社、一九七七年)三七八頁。
- (41) 注7岩内誠一『教育家としての石田梅岩』六六頁の引用による。
- (42) 「富岡鉄斎・夫人佐々木氏墓碑拓本」(『鉄斎研究』第七十四号、鉄斎美術館、二〇一九年)一一〇頁。兵庫県立美術館の柏木知子氏の展示による。
- (43) 「富岡謙蔵生誕一四〇年記念 鉄斎と謙蔵」(鉄斎美術館、二〇一三

年)、柏木知子氏解説。

- (44) 注19 寺田貞次『京都名家墳墓録』一七一頁。
- (45) 注40 富岡益太郎編「富岡鐵齋年譜」三四八頁。
- (46) 筆者が調査、撮影したのは二〇二四年三月三日である。
- (47) 坂上弘子『神光寺墓地墓碑銘―大坂懷徳堂・平野含翠堂関係者を中心として―』(私家版、一九九八年)。同書には墓所の見取り図もあって便利である。
- (48) 土橋友直の子の敬直が建てた合葬由来碑が土橋家墓所内手前に立っており、そこに祖先の墓四基をここに改葬するのに「年載既久、柩皆不完、更制巨棺合葬」といつている(前注、坂上弘子『神光寺墓地墓碑銘―大坂懷徳堂・平野含翠堂関係者を中心として―』三一頁、および巻頭写真)。「柩」はみな壊れていたため、改葬の際に大きな「棺」を作って合葬したというのであり、もし火葬で遺骨だけ葬られていたのならこうはなるまい。友直らの墓も同様に土葬だったのであろう。
- (49) 『喪祭私説』は吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』七(関西大学出版部、二〇一八年)に影印掲載した。その六二頁参照。
- (50) 注2 吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について―東アジア文化交流の視点から―」(二) 一一頁以下を参照。
- (51) 含翠堂および懷徳堂については、森繁夫『含翠堂考』(大阪青年塾堂、一九四二年)、脇田修・岸田知子『懷徳堂とその人々』(大阪大学出版会、一九九七年)、梅溪昇編著『大阪府の教育史』(思文閣出版、一九九八年)第二章第三節「含翠堂」、同第四節「懷徳堂」、湯淺邦弘編著『懷徳堂事典』(増補改訂版、大阪大学出版会、二〇一六年)を参照した。
- (52) 『喪祭私説』喪礼の冒頭部分に「喪禮之廢久矣。今世之制、墳墓皆寓佛寺、不許自占塋域。喪祭之禮、歛葬之儀、唯浮屠是聽、不復問古制、以成頑弊焉。至於愚夫愚婦、信其誑誘、髻髮火化、不以爲異者、固不足論」という(注49 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』七、五七頁)。「今世の制」として独自の塋域を作れず「仏事」に墳墓を設けるのは致し方ないとしても、世俗は「浮屠」(仏教)の言いなりになって「髻髮」(遺体の剃髪・「火化」(火葬)しているとして、その弊を強く非難している。
- (53) 注49 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』七、六二頁。
- (54) 注47 坂上弘子『神光寺墓地墓碑銘―大坂懷徳堂・平野含翠堂関係者を中心として―』一二頁に載せるスケッチ。
- (55) 水戸藩における儒墓が四角錐型であることについては、注18 吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について―東アジア文化交流の視点から―」(三) 一四頁参照。観瀾の墓については産経ニュース「天皇に強烈な反省迫った尊皇家・三宅観瀾」による(<https://www.sankei.com/article/20220126-PH7TINOS36N7Z14A4BSSVUOQ5Y/110114年三月九日閲覧>)。
- (56) 筆者が調査、撮影したのは二〇二四年三月十日である。
- (57) 注18 吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について―東アジア文化交流の視点から―」(三) 一四頁。
- (58) 木村敬二郎「稿本 大阪訪碑録」(浪速叢書第十、一九二九年)三五七頁。なお、芳春妻安村氏および毅齋妻真多氏の墓碑文も同書に採録されている。
- (59) 三原研田「研田書記」(私家版、一九七五年)に当碯の拓本を載せ、二十七歳すなわち昭和十二年(一九四二)に「石浜純太郎博士から委嘱をうけて揮毫」と記している。筆者を通じてこのことを知った宇澤俊記氏は「なにわ大坂をつくった一〇〇人 18世紀―19世紀(幕末)篇」(濤標、二〇一九年)の「富永仲基」の項で紹介してくださった。
- (60) 三原研田については、吾妻重二「泊園書院出身の東洋学者たち」(吾妻重二編著『泊園書院と漢学・大阪・近代日本の水脈』、関西大学出版部、二〇一七年)二〇〇頁以下参照。また吾妻重二監修・横山俊一郎著『泊園書院の人びと―その七百二人』(清文堂出版、二〇二二年)に略伝を載せる。
- (61) 「富永氏墓碑銘」の関西大学総合図書館請求番号はLH27K8415。そ

の書誌情報については吾妻重二編『関西大学泊園文庫 自筆稿本目録
稿（丙部）』（関西大学アジア文化研究センター、二〇一三年）二三頁
参照。この目録稿は筆者が作成したのだが、当資料中に招魂碁の記
述があることを迂闊にも失念していた。



図1 奥が石田梅岩墓 手前の浅見綱斎墓に寄り添うように向き合っているのが印象的である



図2 石田梅岩墓 すぐ後ろに背中合わせに立つのが薩埵徳軒墓 左側奥に手島堵庵夫妻墓が並ぶ

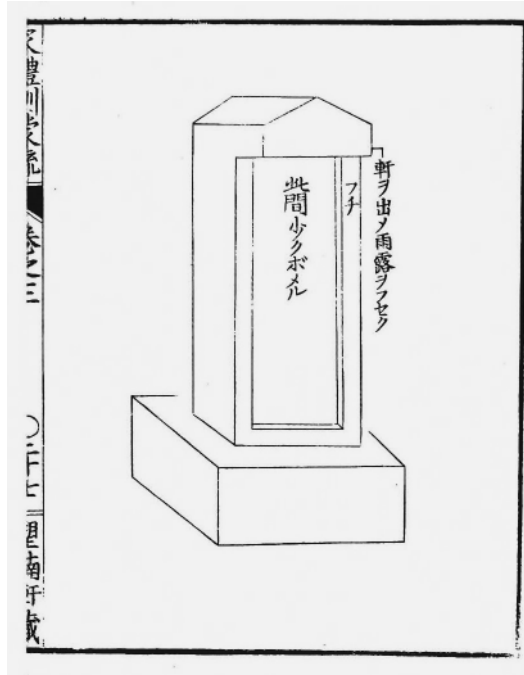


図3 若林強齋『家礼訓蒙疏』墓碑図



図4 手島堵庵墓とその妻の墓



図5 戦前の手島堵庵墓



図6 手島和庵とその妻の墓



図7 手島毅庵らの墓所 一番手前が手島毅庵墓 背中合わせに和庵夫妻の墓が並ぶ

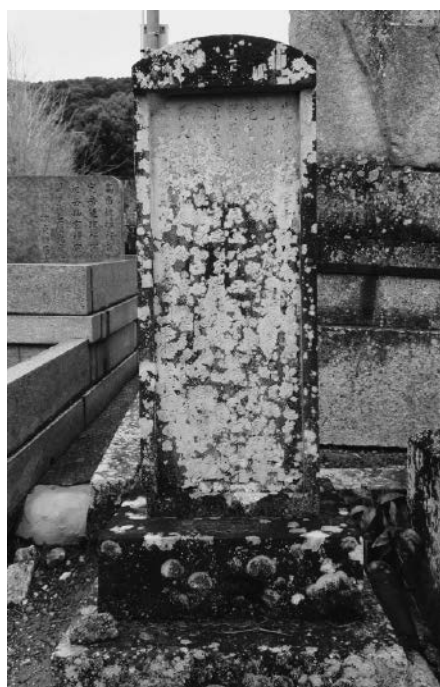


図8 杉浦止斎墓



図9 中沢道二墓 左は中沢道輔墓、右は浅井祐敬墓



図10 上河淇水とその妻の墓



図12 薩埵徳軒墓 すぐ後ろが梅岩墓碑背面



図11 上河淇水墓手前の「手島氏塋域」標石



図13 柴田鳩翁墓



図14 手前が柴田遊翁墓 背中合わせに立っているのが柴田鳩翁墓



図15 柴田鳩翁墓（昌福寺）



図16 柴田遊翁墓（昌福寺）



図17 右が大江玄圃墓 左に大江藍田墓と玄圃妻の墓（「股野氏之墓」）が並ぶ



図19 大江荆山墓



図18 大江池岸墓



図21 鎌田一窓墓（左）と鎌田柳泓墓（右）

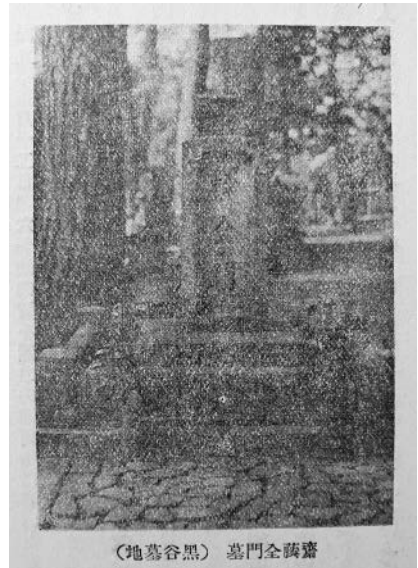


図20 齋藤全門墓

図22 鎌田一窓らの墓の実測図(戦前)
 右下が一窓墓、上が柳泓(玄珠)
 とその妻河井氏の墓、左下が鎌
 田玄逸および一學の墓(いずれ
 も柳泓養子)

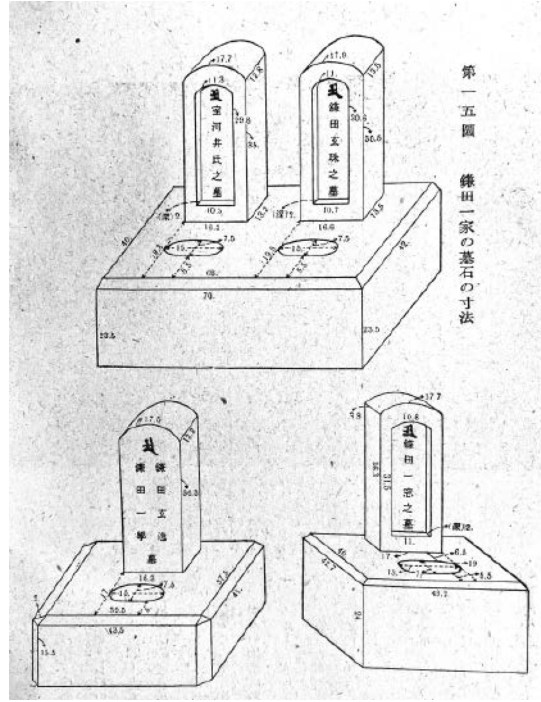


図23 富岡家墓所 手前が富岡以直墓、ついで鉄斎墓、謙蔵墓



図25 富岡鉄齋墓



図26 富岡鉄齋墓碑拓本



図24 富岡家墓所（大雲院時代）



図27 土橋本家墓所 正面奥が土橋友直墓



図29 土橋友直の妻三上氏墓



図28 土橋友直墓



図30 土橋宗信墓



図31 三宅石庵ら懐徳堂創設者たちの墓所 左端が石庵父母の墓、その右手奥が石庵墓



図32 三宅石庵墓 右は妻岡田氏の墓



図34 三宅春樓墓

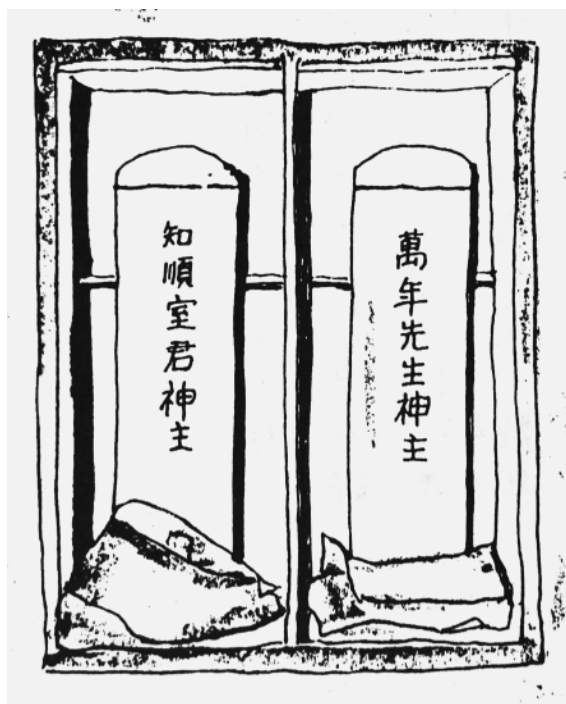


図33 三宅石庵および妻岡田氏の『家礼』式神主
(神光寺所蔵)



図36 長崎黙淵墓(左) および中村良齋墓(右)



図35 井上赤水墓 右は妻井上氏の墓



図37 富永家墓所 右端が富永芳春墓 その左が芳春妻の安村氏墓 ついで芳春長男の穀齋墓および穀齋妻の真多氏墓 左端が富永仲基招魂碣



図38 富永芳春墓

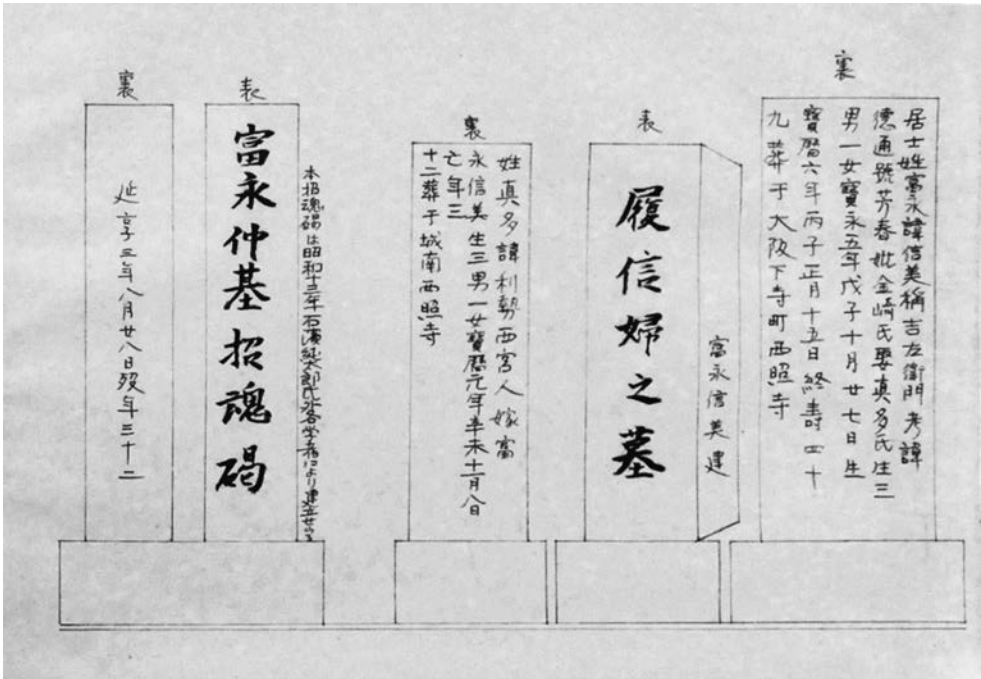
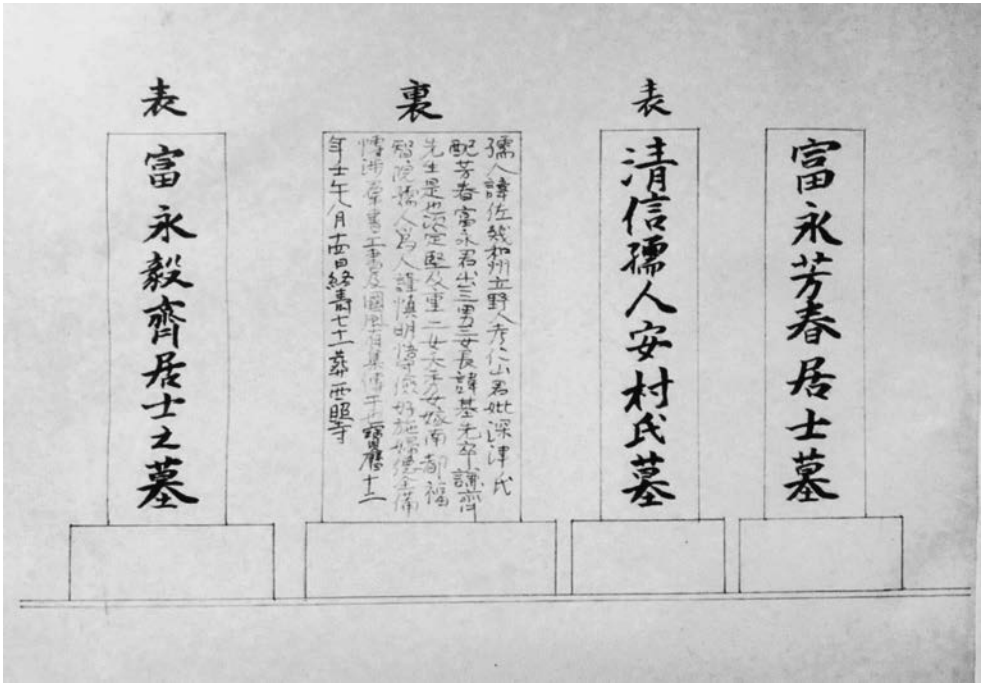


図39 「富永氏墓碑銘」(関西大学泊園文庫蔵)

Jia-li Style Confucian Tombs in Japan:
A Study from the Perspective of Cultural Interaction
in East Asia, Part 5

AZUMA Juji

During Edo-period Japan, many Confucian tombs were constructed following the pattern of Zhuxi's *Jia-li* of Nansong China. However, little research has been conducted on this subject. In continuation to a previous article, this paper describes the grave system and its characteristics in an examination of field surveys and literary materials. This paper illuminates the ideological expression of Confucianism in Japan.

キーワード：朱子学 (Zhuxi's Thought)、石田梅岩 (ISHIDA Baigan)、手島堵庵 (TEJIMA Toan)、富岡鉄斎 (TOMIOKA Tessai)、含翠堂 (Gansui-do)、懷徳堂 (Kaitoku-do)、三宅石庵 (MIYAKE Sekian)